

NATURAL VOICE

エール学園支部

日本語教師という仕事

人間を変える仕事

「教育」とは何だろう・・・と問えば、そのもっとも根幹にある営みは人間を変えることだといえる。私たちのように、成人した若者たち、しかも日本とは異なる教育体制や社会で育った学生たちに日本語を教える仕事に携わっていると、ことさらそれを強く感じる。

たとえば日本語の発音の基礎となる「お」という一音さえも、それらしく発音するには、あごの開き方、喉の緊張度、腹筋の動きや呼気さえも、それまでの母語とは異なるものにしなければならない。そのため、まるで体育や音楽の授業のように、体と気持ちをリラックスさせて、練習を素直に受け入れ、何度も繰り返して、新しい音感と反射を身につけねばならない。その際、お互いが自分のそれまでの習慣を変えたり、変えられたりすることを恐れていたたり、拒んだり、ためらったりしていると目的はなかなか達成されない。

学生が自ら「変わる」ことを積極的に望み、受け入れる意思と、教師との信頼関係なしに「教育」は存在できない。したがって、こうした学習者の動機や相互関係の維持、深化を重視しない日本語教師はいないし、教授法やスキルの開発もそういう発展の道を行ってきた。(そこには危ういものも潜んでいるが・・・)

母語とは異なる言葉をはじめて自分の声にするときの、学生たちのためらいの表情とまなざしは初々しく美しい。何度も体験していながら、やはりそのたびに心動かされる。しかし、1年も過ぎると、彼らはいつものまにか日本語の談話構造や社会習慣も理解し、自分の情緒や意思にすっかりなじませる。ついには受身から転じて、私たち教師に自信たっぷりの顔で皮肉をいったり、ユーモアのあるいたづらをしかけてくる。それは彼らが生活と勉学で辛苦して創り上げた新しい人格なのだ。その姿に内心感激しながら、いつしかこちらにも、すっかり自分が変わっていることに気づくのである。(新美益子)

組合の団体交渉要求事項と交渉内容

2006・12・15 現在

組合要求項目	回答・妥結内容	交渉
1 専任講師の「就任承諾書」についての協議		未了
2 専任講師・非常勤講師の残業手当を支払うこと	業務改善に努力する	未了
3 4日以上勤務の非常勤講師の健康診断を実施すること	実施予定	合意
4 中上級メンターの担当クラスを1クラスとすること(現行2K2クラス 2Z2クラス)		未了
5 学校主催のコースデザイン報告会について業務の位置づけを明確にし、担当の手当を支払うこと	専任業務のひとつと位置づけている	
6 協定書2項(専任講師の退職金の位置づけと規定について2006年度内の合意に向けて継続して協議する)の協議		未了

前回の交渉は、10月27日に行われましたが、学校側から回答がありません。組合の申し入れ書を再掲します。年内に協議の場をもちたいと再度、連絡中です。

第1回

エール学園支部会開催

12月7日(木)に支部会を持ちました。非組合員の参加も可能です。今回、オブザーバー参加がありましたが、今後も大いに歓迎します。

議題

- 1 支部独自の予算について
- 2 学園との交渉について
- 3 今後の活動について
- 4 その他

日本語教師の働き方 1 講師の皆様は労働条件などについて、アンケートのご協力をお願いします。
第1次回収 12月20日(水) もし遅れた場合、第2次回収日を設定します。

労働時間と時間給 日本語教師にとって「時間給」「労働時間」をどう見るかは、組合としても、日々の教師の営みを考える上でも重要なポイントとなってきます。今回の交渉で、学校は、「授業の準備・実施・後片付けの労働は、規定の「時間給」と「コマ数」で定める講師料で支払われており、授業時間以外の拘束はしていないため、授業準備やあとの整理にどの程度時間をかけるかは、講師の裁量内であり、講師の「残業手当」支給という考えはとらない」との回答でした。

一般非常勤の場合、「残業手当」が認められないとしたら、「時間給」で対価を求めるしか方法はないのでしょうか。実労働時間で換算すると、法定の最低賃金を下回るようなレベルの「時間給」の講師の方も多いと思います。当面、時間給と労働時間の両側面で、具体的に労働条件を改善していきたいと考えます。この問題が難しいのは教育活動が、組織的な分業や業務内容の定型化が難しく、加えて、担当する学生の数や学習意欲・担当科目・教材・授業活動・協働する講師陣によって、条件が左右されることです。同じ「時間給」でも、時により、クラスにより、労働量が大幅に異なることも実態としてあります。これまで、おおむね、私たちは自己研鑽の思いもあり、これを受け入れてきたといえるでしょう。しかし、労働の対価として、あまりに適正を欠く状態に至れば、実態を示し、是正を求めることが、結果として安定した教育現場の維持、充実したクラス運営、授業活動の基盤づくりにつながると考えます。講師の皆さんの声を伺いたいと思います。

日本語教育科の成長に伴い、学生数の増加、教育内容の変化、講師陣の再編成、組織改変などが行われ、専任や教務職員はそのつど、新たな状況に対応すべく、個人の生活時間を削減して、業務をこなしてきました。長年続いてきたこの状態を緩和する措置をぜひとってほしいと思います。組合もその原因分析と解決方法を探り、双方で考え、改善に努力したいと思います。

しかし、それでもなお超過する勤務状態が続けば、「残業」とみなし、手当を支払うべきだとの立場です。

日本語教師の働き方 2

日本語教師といっても「教える相手」と「場所」、「雇用主」は国内国外もあり、多種多様。そのため雇用条件も労働環境も勤務年数による賃金水準も、これこそ千差万別。さらに、日本語教師をしたいという人々の動機も目的もさまざまで、一様ではない。しかし、安定した職業として、この「日本語教師」像を確立していくには、教師自身の努力はもちろん教育機関、雇用側のモラルと経営の質の向上、公的な支援制度、行政の言語教育政策の充実など、構造的な条件がもとめられる。今後、10年を見通したとき、はたして、この条件は改善するだろうか。おそらく待ってもその日は来ないだろう。そうなるように働くことが、希望への近道だと考えたほうが、たぶん身体と心がいい！

ケース1 海外で働く

< タイのある国立大学で教える場合 >

4年制大学卒業以上 日本語教育学専攻 または日本語教育養成講座420時間以上受講
教育経験2年以上 2年以上勤務できる人
* その他 タイ語ができる人。ビジネスが教えられる人。
* 書類審査でパスしたら、現地面接試験（渡航費自己負担）

勤務条件 時間 午前8時から午後5時 週12コマ(1コマ60分) 1学年30人 年間1200時間
有給10日(半年後) 約18000バーツ・住宅手当8000バーツ(約8万5000円)
労働許可証・健康保険は保証。

日本語教師の勤務形態アラカルト

空いた時間と曜日・学期休みを活用して・・・

二つ以上の学校・職場を掛けもち (大学+日本語学校)(大学+大学)(日本語学校+日本語学校)
日本語教師以外の仕事も掛けもち (英語+日本語)(家庭教師+日本語)(短期バイト+日本語)
朝のみの個人レッスン・夜のみのビジネスマン (企業派遣)(語学教育系企業+日本語学校)

さまざまな国内・国外雇用機関・で・・・

国費留学生対象の研修センターで教える。
大学の留学生別科で教える。
大学で留学生に日本語必須科目を教える。
専門学校で教える。
日本語学校で教える。
派遣企業に登録し、プライベートレッスンで教える。

さまざまな立場で・・・

非常勤講師(大多数) 専任講師 教務職員

さまざまな動機で・・・

日本語・ことばが好き
外国人と接する機会を求めて
時間の自由がある

あ～、懐かしや、ミャンマー



<ドン・イースト・ミボ>

まるでサファリパーク(行ったことないけど)のような、テーマパークの入り口のような空港の窓口。
でも、その片隅にはライフルを肩に下げている人の姿が。ミャンマーに来たんだと実感した瞬間だった。

1998年4月から、1年間、わたしはミャンマーのヤンゴンで暮らした。何でもあり！まるでジェットコースターに乗っているかのような出来事の連続の日々だった。夜10時頃の突然の訪問者。新しい日本語学校ができると聞いて、そこで教えるのはどんな先生か見に来た…会わせろ…ということだった。日本ではあり得ないことだ。でも、本当にわたしがびっくりしたのは、そんな訪問者をあたりまえのように「お～、よく来てくれたね～」「今、先生を呼んでくるからね～」と、スタッフの人が笑顔で迎え入れたことだった。それにつられて、パジャマ姿のまま、満面の笑顔で対応している自分自身がたまらなくおかしかった。ここでは何でもあり！と実感した瞬間だった。この何でもあり！という感じがとても心地よく、ミャンマーでの暮らしを最後まで楽しいものにしてくれた。

土曜日と日曜日に2時間の授業を3クラス、平日は出社前のビジネスマンとの早朝レッスン。日中に授業準備をし、夕方には再び授業を行う。直説法で学んだことがない人ばかりで、学生もわたし自身も、最初は戸惑い、お互い手探りのようなところもあった。それでも、そんな中、めきめきと話せるようになり、いっしょに働いていたスタッフがその人に対して競争心を抱くようになるまで上達した人もいた。

月曜が休日だった。バスで街に出、まずはスーレーパゴダへ。特に信心深いというわけではなく、憩いの場のような捉え方でのんびりと過ごした。そのあと、道端の店で昼食をとり、街をぶらぶらする。ちょっと疲れたなと感じたら、ブラックコーヒーを飲む店に足を向ける。ミャンマーで広く飲まれているコーヒーはコーヒーミックスといって、砂糖もミルクも入った粉末状のもので、わたしも日々、これをおいしく飲んでいたが、ブラックコーヒーはわたしにとって、ささやかなイベントのようなものだった。

夕方になり、休日のしめくりは、おいしい果物の生ジュースを飲ませてくれる店に。ジュースのおいしさもあったが、「何飲むの～」「どこ行って来たの～」というひとりの少年との、会話には程遠いやりとりが楽しみで通っていた。こんな幼い子供があちらこちらで働いている。確かにこれは望ましいことではないが、それでも、少し恥ずかしげに一人前の男のように振る舞い、働く姿はとても魅力的だった。

この暑い中、歩くなんてとんでもない！ 荷車タイプのバスには乗るな！

道端の店で食べるな！ イチャクエが食べたかったら、もっと早起きして来い！

そばにいてくれた人たちだけでなく、お店の人にまで怒られる日々。そんな一つ一つ出来事が、温かい気持ちにしてくれた日々だった。日本に戻り、まるでカラーテレビから白黒テレビの世界に投げ込まれたような気がした。街並みを歩く人々の身につけている服の彩り豊かさが恋しかった。それと同時に、日本に戻って来てからのほうが不安で、心細い…。灰色の中をベルトコンベヤーに乗せられて、急ぎ足で進まなければ…。日本での生活がそんなふう感じられ、辛かった。

今はベルトコンベヤーどころか、またジェットコースターのような生活に戻り、もがく毎日だが、決して白黒の世界ではない。近くにいるすべての人が再び、彩りを与えてくれているような気がする。